

## 松下国際財団 研究助成

# 研究報告

【氏名】胎中 千鶴

【所属】(助成決定時) 目白大学(非常勤講師)

【研究題目】相撲の「国技化」をめぐる歴史学的研究  
—台湾・朝鮮・満州における相撲の受容過程を手がかりに—

### 【研究の目的】

本研究は、帝国日本の植民地(台湾・朝鮮)及び占領地(満州国)において、日本の伝統的な娯楽競技である相撲が、当該地域にどのような経緯を経て持ち込まれたのか、また当該社会の人々にどのように受容されたのかを、史料分析や現地調査により明らかにすることを第一の目的としている。

それはまた、1920年代に「国技」と自称した大相撲が、満鮮巡業や軍隊慰問など、戦時期の「外地」と関わる諸活動を通して実質的な「国技化」を果たし、一定の社会的認知を獲得していく過程としてとらえることもできる。本研究の第二の目的は、相撲の「国技化」の経緯を、「内地と外地」という二つの視点から考察し、そこから現代の日本社会に連続する社会的心性の一端を解明することにある。

相撲に関する研究は、これまで主に民俗学や古代・中世日本史研究の分野において研究蓄積が進み、特に相撲の起源や発展過程の分析などについて学術的な検討が数多くなされている。

しかし本研究では、先行研究がきわめて少ない近現代日本社会における相撲の歴史に注目し、相撲が「国技」化されていく経緯を、内地と外地という二つの視点からとらえ直すという手法を試みた。こうした問題関心と研究手法は、現在の東アジア史や日本近現代史研究を横断的にカバーするものであり、歴史学研究において一定の意義をもつであると考えている。

### 【研究の内容・方法】

助成受領期間中は、主に以下の3点について調査をおこなった。

#### ①大相撲の台湾巡業に関する調査

植民地台湾では、1895年の割譲直後から主に在台日本人を対象とした相撲巡業がおこなわれていた。その後1940年代まで、台湾各地への巡業は断続的に実施されている。そこで今回は主に明治期から大正期に至る台湾における相撲興行の関連史料収集作業を、主に国立中央図書館台湾分館及び日本の国会図書館でおこなうと同時に、当時の台湾巡業を実際に見聞した台湾人への聞き取り調査も実施した。

## ②1910～30年代の八尾秀雄の活動に関する調査

八尾秀雄は1906年台湾に生まれた日本人の相撲指導者である。1910年代に父が考案した相撲体操を台湾全島の小学校を巡回して指導し、1929年には『体育的相撲舞踏』を台湾角道奨励会から出版した。そののち、1930年代には内地で相撲の普及に尽力し、1940年代には満州に渡って活動を続けた。

八尾秀雄の台湾における活動については、現時点で彼自身の著作以外に関係史料の整理がほとんどなされていないため、今回は国立中央図書館台湾分館を中心に、当時台湾で刊行された体育雑誌、教育雑誌などから八尾の関係史料を収集した。

## ③1930～40年代の台湾の学校教育における相撲の実態調査

1936年の学校体操教授要目改正により、相撲は小学校の体育に正式な種目として導入され、さらに1942年には国民学校初等科第5・6年男子と高等科1・2年男子の体育種目にも採用された。台湾でもこれに準じた形で公学校（台湾人子弟向け小学校）に相撲訓練が導入され、また地域社会の治安維持を目的として各地で結成された壮丁団の鍛錬の一環としても奨励された。

助成受領期間中は、休暇を利用して台湾に滞在し、国立中央図書館台湾分館を中心に、当時の教育雑誌や新聞などの関連文献の収集にあたった。また当時の公学校で相撲の指導を受けた台湾人への聞き取り調査もおこなった。

## 【結論・考察】

本研究では「外地」における相撲の受容過程を学校教育や軍事教練、地域社会活動などの面から考察し、娯楽スポーツと「国技」の二面性をもつ相撲が当該地域社会といかなる関係性を結んだのかを具体的に検証していくための初歩的な調査と考察をおこなった。

また台湾・満州において、「国技」としての相撲の普及に努めた日本人指導者、八尾秀雄の活動については、これまでほとんど実態が明らかにされておらず、本研究がその端緒となったと考えている。

今後は、戦時期の大相撲が「国技」としての社会的認知を得ていく過程で、日本社会は大相撲に「あるべき姿」として何を期待したのか、大相撲はそれに対してどのように呼応したのか、という点を、時代背景をふまえつつ丹念に見ていくつもりである。これは内地・外地における大相撲巡業や軍隊慰問、社会奉仕活動など、主に1920年代から1945年までの大日本相撲協会の活動について、詳細に追跡する作業となろう。